
書 評

パスカル・ボイヤー (鈴木 光太郎・中村 潔訳)
叢書コムニス 06 『神はなぜいるのか?』
NTT 出版, 2008 年 3 月刊, 433 頁+xli, 3,800 円 (+税)

今野 啓介

宗教的信念の起源は何であろうか。なぜ多くの文化において、同様の宗教的言説が見られるのか。科学的な説明が常にもっともらしい知見を与えてくれるにもかかわらず、なぜ現代においてもさまざまな儀礼が執り行われ、超自然的存在の想定が人々の間で頻繁になされるのだろうか。本書は、そうした宗教に関する根本的な関心に対し、認知科学や進化心理学などにおける最新の知見を用い、人間の「宗教」という営みが科学的根拠に基づく必然的行為であることの証明を試みた労作である。また同時に、リチャード・ドーキンスやダニエル・デネットらに代表される、近年盛り上がりを見せている宗教の科学的論証の先駆的仕事となった著作でもある。原著は 2001 年にアメリカ版として出版された *Religion Explained: The Evolutionary Origins of Religious Thought* (New York: Basic Books), 邦訳に際しては翌年に出版されたイギリス版に依っている。

宗教研究は、これまでは哲学や人類学、宗教学などの人文学領域が主に担ってきた仕事であった。だが、この科学と相反すると思われる不可解な文化現象を、改めて科学の土俵において解明しようという試みが、近年の自然科学における諸分野で高まりを見せている。1960 年代に広く行われた実験室実験のようなアプローチこそ少ないが、科学者たちによって培われた多くの知見が、宗教的信念や行動に関する多くの非合理性を説明するに足る要素を提供している、と主張する研究者たちが増えつつあるのである。本書における説明モデルは、これまでの科学的知見を有効に当てはめた、いわば「科学的宗教学」の提案ともいえる著作となっている。

Pascal Boyer はパリ生まれ。パリ大学ナンテール校で博士号を取得し、現在はセントルイスのワシントン大学で教授職を勤めている。彼の出自は文化人類学であり、本書においても彼がフィールドとして携える民族の中からいくつかの事例を用いた論証が行われている。また、1999 年にはカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校において客員研究員を務め、そこで培った認知科学や進化心理学の知識が、本書において展開される論述の核となっている。本書の他には *The Nature of Religious Ideas: A Cognitive Theory of Religion* (Berkeley: University of California Press, 1994) においても、それらの知見はすでに用いられているが、本書において彼の一連の研究の集大成が実現されているといえるだろう。

以下に本書における構成を記す。

- 第1章 何が起源か？
- 第2章 超自然的概念とはどのようなものか？
- 第3章 宗教を生み出す心
- 第4章 なぜ神や霊か？
- 第5章 宗教、道徳、災い
- 第6章 宗教はなぜ死をあつかうか？
- 第7章 儀礼はなぜあるか？
- 第8章 教義、排除、暴力はなぜあるか？
- 第9章 なぜ信じるのか？

本稿では紙幅の都合上、9つの章を3部のまとまりに区分して紹介する。読了後の主観的な印象に基づくものだが、宗教的信念の生起と人間の推論システムとのかかわりを考察する第1章から第3章（第1部）、そして神や霊、応報観念、死といった、宗教的概念に特有のモチーフが生み出される原因を扱った第4章から第6章（第2部）、第1部・第2部で扱った理論仮説を用いて具体的な宗教的実践の存在理由を論じ、現代まで宗教的信念や実践が維持されている原因を総合的に説明する第7章から第9章（第3部）という区分を用いた。

まず第1部では、宗教の起源に関するいくつかの既存のシナリオを提示することから筆者の論立ては始まる。それは、宗教は諸現象に対し説明を与えるものとする知的シナリオ、安らぎを与えるものとしての情動的シナリオ、社会的秩序を提供するものとしての社会的シナリオ、そして宗教を認知的錯覚と見なすシナリオである。筆者はこれらのシナリオの問題点を指摘した上で、宗教的概念を「ミームとしての文化」と見なし説明する。ミームとは、考えや価値、物語などを他者に伝える際に、他者の記憶へ貯蔵されやすいように表現するプログラムのことで、文化の伝達は、その伝達過程の繰り返しにおいて原型のゆがみやバイアスが伴うものであるという。そしてそのゆがみの蓄積過程において、相異なった源泉に由来するにもかかわらず類似性のみられる文化が、感染力の強い、すなわち諸宗教に共通してみられる概念であるという。

また伝達された新しい文化的要素を受容する際に人間が推論するシステムにおいて、ある種の「テンプレート」が存在すると筆者は言う。たとえば「セイウチ」という新しい概念が与えられたときに、人はその情報を合理的に処理するために、動物全般の情報を処理する「動物テンプレート」を起動させ、周辺の情報から、セイウチが哺乳類であり、四足で移動する、といったことを推論する。それらの情報は、個人内に形成された既存の動物テンプレートにおいて定義のなされた情報であるため、「セイウチ」という新しい概念が入ってきても、合理的にテンプレート内で処理することができるのである。

筆者によると、人間のあらゆる宗教的概念は、これらのテンプレートの特定の組み合わせによってもたらされるものであるという。それは、「日常的・一般的なカテゴリー」と「反直感的要素」という組み合わせである。たとえば「人の会話を記憶する黒檀」という概念は、人間の推論システムに対し、植物という一般的テンプレートの適用と、一般常識に違反する反直感的情報の処理を要求する。またそれらの組み合わせのうち、宗教的概念としてもっともらしいものを識別する感性、すなわち心理学者ジャスティン・バレットのいう‘Theological Correctness’が存在す

ると筆者は述べる。このことは、脳内の推論システムにおいてアクセスされやすい特定の組み合わせのみが、幾多の淘汰過程を経て宗教的概念として採用されるという筆者の認知科学的解釈を支持している。したがって、超自然的存在や神、霊といった、われわれの文化において共通性の高い概念は、限られたテンプレートの組み合わせが脳の推論システムや情動プログラムと直結し、特異な活性化を経た結果として生み出されたものなのである。

第2部では、神や霊の存在、道德や災いとの関連、そして死の説明といった宗教的モチーフが取り上げられる。はじめに筆者は、神や霊といった超自然的存在のイメージがいたる地域で想定される理由について、直観と実用性という視点から論じる。彼はバレットの学説を引用し、ある状況の成因に何らかの超自然的存在の痕跡が見られると想定するわれわれの心性には、人間の進化過程で猛獣などの捕食者への対処を強いられたことが関係していると述べる。現代におけるわれわれの超自然的存在の想定は、捕食者を検出するシステムが過剰反応した結果によるものだというのである。そして、この検出過程において神や霊という心を持った人間的な表象が形成される理由として、彼は人間の直観的概念の性質を援用する。人間には動植物や抽象的存在などの行為者を、意図を持った、すなわち心を持った存在と見なす直観的期待があるという。そのような心を持った存在と人間との相互作用が想定されるうちに、神や霊は人間的性質を持った存在としての表象を担うようになったのである。

超自然的存在の能力は、自然災害や不可解な出来事など、世界のあらゆる事象と関連付けられ、しばしば神は全知なる存在として言い伝えられてきた。しかし人々が最も関心を寄せるのは、それらの超自然的存在が「戦略的情報」を知っているということである。戦略的情報とは、本書においては個人が何らかの行動を起こす上で手がかりとする情報のことである。たとえば翌日取引の交渉のために会う相手が、前日に自分の会社と敵対する会社の人間と会っていたという情報を得た場合、個人は翌日の話題や自己が取る態度について何らかの思案を行う。こうした情報は様々な知識のうち、人間にとってはより重要な、実生活に欠かせない知識である。そして、「超自然的存在がもし戦略的情報を知っていたら」という空想は、われわれを期待させ、空想ではあるものの脳内の推論システムを興奮させる。したがってこうした推論は、期待どおりに展開しない現実の推論よりも容易に伝達される。脳の活動にとってはこちらの推論のほうがたやすく労力が少ないため、作り上げずにはいられないのである。

宗教と道德との関連についても、筆者は実際的問題の視点から論じている。多くの宗教的教義が、人間社会に対し道德や規律を与えている。だが、実際に宗教を道德的たらしめているのは人間の道德的直観であると筆者は言う。道德的直観は、「道德的推論モデル」と「道德的感情モデル」から構成される。前者は脳内のテンプレートに特定の人間と行為を当てはめることによって、既存の教義や規則に則した特定の反応を惹起させるモデルであり、後者はある特定の行為を行う（あるいは行わない）ことにより、理由を意識せずとも不快感を抱くモデルである。彼は、幼児に対して道德性の実験を行ったチュリエルやシーガルの研究を引用し、幼い子供にも「人を傷つけてはいけない」などの道德的直観があり、悪徳の度合いも判断することができることを紹介する。その直感を人間が保持する理由は次のようなものだ。人間は進化の過程において、他者との度重なる社会的相互作用を経験してきた。そして、信頼できる他者の選定、および信頼される自己の実現のために、自己と他者の行為に対する道德的直観が発達したのである。人間社会におけ

る道徳的直観の維持のためには、あらゆる戦略的情報を把握する超自然的存在はまさにお誂え向きであった。それらの存在による監視ゆえに道徳性が維持されているという観念は、一度保持されると（筆者はこれを「寄生」と呼んでいる）、人間の推論システムへの当てはまりの良さゆえに、現代まで維持されることとなったのである。

また宗教による災いの説明についても、人間の社会的相互作用の歴史から行われる。災いとは、「なぜ私が」「なぜ彼が」などといった、当事者と災いとの個人的関係と見なされうるものであり、単に統計上の確率ゆえに起こった、あなたが被ったのは偶然だという説明は、情動に訴えかけはしない。この個別の関係において、人間は見えない何かとの相互作用を思い浮かべるのである。この相互作用を説明する宗教的概念の多くは、超自然的存在による報復、あるいはより人間的な力として説明される「邪視」や「妖術」である。それらは、不正に利益を得たという疑いを与えられる者に対して災いがもたらされるという概念であり、社会集団において正当な相互行為を維持するのに役立っている。このことから筆者は、宗教による災いの説明を、人間の社会的相互行為が営まれてきた過程において推論システムに宗教的概念が「寄生」した結果として提示している。

そして宗教史上、常に密接な関わりを維持してきた「死」という概念について、筆者はこれを死体の認識プロセスからの説明を試みる。人類学におけるフィールド研究の蓄積は、多くの社会において、遺体に関する穢れの意識と葬送儀礼といったかたちでの関わりにおいて死が認識されていることを明らかにしてきた。このことは、彼らにとって遺体が死という概念を扱う上での媒体となっており、死者や霊などの超自然的存在は、あくまで生存する者との関わりにおいて語られるということを示している。そして筆者はこれらの知見を進化生物学の領域に落とし込み、直感と推論システムを用いた説明を行う。まず、穢れの概念は呪術的思考やシンボリズムにおいて語られるようなものではなく、人間の進化過程において有害な感染を防ぐために、無意識的に形成された概念であると説明する。また死者にたいする悲しみや恐怖感の生起は、「有生性システム」と「人物ファイルシステム」との解離によるものであるという。人間は、ヒトを含めたあらゆる生物の活動から、観察対象の生死を判断することができる。また、日常において何らかの形で出会う人物に対して、彼らの顔や言動から、ファイリングされていた人物記憶を引き出し、目の前の人物を特定することができる。このシステムは当然生きた人間との相互作用を目的として起動される。だが、有生性システムにおいて死の状態にあると判断されながら、人物ファイルシステムが遺体の人物を特定しようとしている活動状態は、矛盾した認識活動を行っていることになる。そのために強い情動反応が引き起こされ、眼前の死者に対して悲しみや恐怖の感情を抱くと筆者は述べる。こうした不調和を引き起こす非人間的な存在を正常に認識するために宗教的信念が駆り出されることによって、人間は推論システムを円滑に働かせることができるのである。

第3部では、儀礼や教義といった宗教的実践にかかわりの深い要素や、異教の排除、原理主義派に見られる暴力の行使など、現実社会における表象に関する考察を行っている。まず筆者は、多様な地域に見られるそれぞれの儀礼が、一見目的対象（婚姻や成人化）とは無意味な行動のように感じられるが、それらはやはり基本的なシステムのはたらきと社会的相互作用の必要性に応じた産物であることを主張する。その際、彼の説明には3つの説明要素が用いられる。第一の要素は、儀礼は感染システムが活性化したことによる危険予防策として講じられるというものだ。

感染システムとは、「穢れ」の概念に見られるような、人間にとって身体的に危害を及ぼすかもしれない対象から離れようとするシステムのことで、必ずしも意識されることはないという。明確な理由は分からないが身体から緊迫感が発せられていると感じる場合、それは危険を察知した感染システムが意識に訴えかけているのである。儀礼は、それに対応する予防措置として講じられるものなのである。また第二の要素は、社会内の相互作用を円滑にするという目的に基づくものである。一人の男性が成人し、村を守る戦士の一員として認識される、あるいは、一組の男女が婚約し、社会内で夫婦として扱われるようになる。一個人のこうした変化は、彼らと相互作用を行う人々にとっては重要な情報である。なぜなら、それによって所属集団の遺伝子保存の戦力が加わる、あるいは遺伝子保存を行うための異性が候補から除外されるからである。そのため、これらの身分の移行に際して、自己と相互作用を行う周囲の人間に対しアピールを行う必要性が生じる。儀礼とは、その手段のうちの形態なのである。ひとたび儀礼がそうしたアピールの定石的行為として定着すると、それは義務化され、行わないことは社会的逸脱行動と見なされる。したがって、たとえ目的が不十分に感じられるとしても、儀礼は社会的相互作用の維持には欠かせないものとなるのである。そして第三の要素は、儀礼の超越的要素である。儀礼の実践は、少年を成人させ、男女に婚姻を結ばせるように、ある対象に変化をもたらす。だが、その過程において何が作用したかを特定する理由は、「空のスロット」の状態にある。こうした状況において、超自然的存在の介入という説明が必要を持つ。それが本当に信頼性を得ているものであろうとなく、空のスロットを埋める一つの説明として最低限の用は果たしているといえるのである。

また教義や排除、暴力といった社会集団レベルでの表象に関しては、宗教集団の経済的自立と存続、集団内における相互作用の維持といった要素を用いて説明される。各時代の各社会において発達したギルドのうち、宗教儀礼を司る宗教ギルドは、非常に専門性を得るのが困難な立場にあった。というのも、宗教的知識人である彼らの提供するサービスは、土着の呪術師やシャーマンなどによって担当される場合もあり、必ずしも単一のギルドとして存続できない状況にあったからである。そのため、それぞれの宗教ギルドは打開策として、儀礼などのサービスをブランド化することを試みた。ほかの提供者によるサービスとの差別化を行い、ギルド内の人間であれば共通して行うことのできる独自のサービスを考案していった。その際、ほかのサービス提供者たちと区別させ、ギルドの独自性と正統性を整然とした形で明示することを目指した結果が、宗教的教義の形成なのである。また教義においては、差別化のために必然的に異教や異宗派の排除がなされた。そして、特定の教義を信仰する信者のグループ化は集団アイデンティティの強化をもたらした。こうした集団力学的プロセスによって、宗教・宗派間の排除が説明されるという。

一方で、原理主義団体による暴力の発生要因は、筆者によると、集団内における離脱の賞罰という文脈で語られるものである。彼らの暴力の多くは、同じ文化的・宗教的共同体のメンバーに対して向けられる。非道徳的な行為や、信仰に関して熱心でないそぶりを見せたことに対し、ほかのメンバーへの見せしめという意味合いを伴った暴力が実行される。つまり、原理主義派が支持する宗教的規範に反する言動を集団からの離脱と見なされることにより、暴力という高価な代償を用いて報復し、そのことによって集団内の結束力を高めようとする意図が、原理主義団体の暴力には反映されているのである。

そして終章となる第9章では、ここまでの理論仮説を総動員させ、「なぜ信じるのか？」とい

う根本的な問題に取り組む試みがなされる。筆者はさまざまな宗教的要素を、それぞれに異なる領域の推論システムが作用する結果として説明してきた。それらの作用は、言い換えれば人間の迷信深さ、心のバランスの欠如、純朴さなどによって引き起こされるものである。したがって、宗教とは論理的な思考と反証可能性の追求を怠ったために生まれた文化現象といえることができる。

しかし、実情はそれほど簡潔にまとめられるものではない。心理学による研究結果は、多数意見の効果や、人間の記憶錯誤が容易に引き起こされること、バイアスの根強さ、期待に反する出来事が生じた際に生まれる認知的不協和を低減させようとする欲求など、宗教的信念が社会集団によって維持される多くの要因を提案してきた。また超自然的存在の想定や儀礼は、社会的相互作用に不可欠な要素をはらんでいる。これらの要因は、宗教的信念が維持されることの必然性を主張する。

そして、宗教的信念は常に実際の場面の必要性和呼応して引き起こされるという特質を持っている。第1部と第2部で紹介したように、人間の推論システムはより活性化しやすい、興奮を誘う説明に誘引される。そのため、科学的論拠に基づく説明よりも、宗教的信念は人々の眼に魅力的に映る。しかし、こうした一連の宗教的信念の定着と維持のプロセスは、「見えざる手」、すなわち脳内の多くの推論システムが相互に連動しながら形成していく、あくまで人間という生物に共通して見られる科学的現象なのである。

以上が本書のおおまかな要約である。宗教という深遠な対象を科学的な知見に基づき紐解いていく試みは、これまで多くの研究者によって希求され、実験などによって取り組まれてきた。しかし、あらゆる宗教現象を説明する知見はいまだに得られていない。本書における議論は、そうした現状を開拓する一線の光を提供しているように見える。

だが「認知科学」と銘打って繰り広げられる筆者の議論は、結局想定域を脱しないように思われる。その理由として、第一に推論システムに対して筆者が絶大な信頼を抱いていることが挙げられる。システムを用いた彼の一連の説明は、「人間の複雑なシステム」が興奮・活性化するという解釈に過度に依存しており、こうしたシステムの実在性が保障されないままに議論が展開される。概念の受容に関するテンプレートを用いた説明においても、そうした想定をすることによって認知的プロセスが観察者の眼に整然としたものとして映るというだけであり、実際にニューロンがそうした活動様式を形成していることは保証されない。この問題は、同様に現行の心理学においてもあてはまる。多くの理論的枠組みはあくまで想定であり、事実ではない（たとえば「無意識」や「アイデンティティ」といった概念が挙げられる）。より簡潔で支持されうる説明を作り出すために形成される、仮説群にすぎないのである。しかし、こうした想定が独り歩きし、一つの客観的事実として広くいきわたってしまうことがしばしば見られる。本書における推論システムの援用は、そうした問題にさらされることを避けられないのである。

また、本書における宗教の捉え方にも問題点が孕まれている。とりわけ実証的研究に際して言えることだが、研究に際しては、対象の定義づけ、すなわち「宗教とはなにか？」を明確化することが必要条件となる。しかし現在、先進諸国を中心に、長きにわたる社会の世俗化過程を経て、宗教的表象も無数の形態を帯びようになり、ひとまとめに括ることができなくなっている。より私事化の進展した、個別的な宗教的表象にあふれる現代において、宗教の明確な定義づけは至

難の業となっているのである。神的存在や儀礼だけが宗教の要素ではない。そうした前提を考慮すると、本書における宗教の捉え方は非常に古典的といえることができる。確かに、人類学がフィールドとして取り上げてきた社会集団や、キリスト教圏における宗教概念を認知科学的に考察することは有益である。しかし、現代における宗教的表象の多様化という事実を加味することによって、筆者の理論的枠組みは大きく見直されなければならないだろう。したがって本書に続くこうした取り組みの今後の課題として、現代におけるより広範囲の宗教的表象を包括した説明概念を提案することが挙げられる。

だが、宗教を認知科学や進化生物学における理論に還元する試みは、宗教研究に新たな風を吹き込ませるという大きな利益をもたらすことに変わりはない。人文学領域から宗教心理学研究に寄せられがちな、「宗教に肉薄する程度が薄い」という批判に臆することなく、学問領域としてある程度の規模を形成することによって、これまで窒息しがちであった宗教の実証的研究の可能性を広げることができるだろう。